

[審査員選評]

『マルセル・デュシャンとアメリカ』を推薦します。

磯崎 新

平芳幸浩の『マルセル・デュシャンとアメリカ』は、デュシャン論の力作です。

関連本が無数にあるなか、著者は戦後アメリカ美術家のなかで、デュシャンの仕事に触発されて独自の方法を搜したアーティストに標的をしぼり、異説でもつれ合った糸のようになっている世界の現代美術言説網の一点突破を試みます。寝技、めくらましなど、禁じ手を駆使したデュシャン（さえも）を正攻法で押し切ろうとしている。賭けともみえる戦略ですが、並々ならぬ強腕、明晰な説得力に充ちている。要領よくアカデミックにまとめられている他の候補作品からは抜きんできているとみえます。

デュシャンはマンハッタンに移住したけど、その地のNYアートは、グリーンバーグ（カント的趣味判断）それにつづくマイケル・フリード（展示性）が理論的支柱で、抽象表現に由来するよりアメリカ的なものが主流となり、デュシャンでさえもイリュージョンの一派とみなされ敵視されており、決して居心地よくはなかったと思われまふ。

この時代のアメリカはアレクサンドル・コジューヴが「動物性（アニマリティ）」と呼んだアメリカ的生活様式が満喫されており、美術界もまた反知性的エンタメ・アートばかりが幅をきかせている。その中で苦況にたたされていたデュシャンの救出（評価）方策を著者はティエリー・ド・デュヴの「制度としての芸術」論を手がかりにする。この論もまたカントの批判書読解に基づいていますが、「芸術」という制度を解体構築したメタ「芸術家」・デュシャン像が持ち出される。土俵を押し出されそうになったとき土俵を消去してしまう論理階梯操作です。この論理をつづけると<ミュージアム>の存在も拒絶されねばならないのですが、晩年にデュシャンの作品（物体）はすべて美術館におさまりました。歴史のアイロニイでしょうか。

NYアートとの乱戦では、私はデュシャンが敗軍の将のようにみえます。著者はその一部始終を記録します。アバンギャルド・モダニズムの敗戦記ですね。私はその心意気に共感しています。吉田秀和賞に推薦する理由です。

読後感です。タイトルにアメリカがついていますが、これはそっくり日本のデュシャン受容なのではなからうか。たしかにマンハッタンに起こった出来事ですが、その情報や当事者はパリやロサンゼルスより先に極東日本に到達しています。フルクサス（第四章）は同時進行でした。先述したコジューヴはアメリカ社会の「動物性」のつぎに、日本では同様の事態が既に四百年前から「道」に没入することを生きがいにする「スノビズム」がつづいている、と指摘します。これが「歴史の終わり」の後の世界のモデルだというわけです。デュシャン的思考法は野蛮なアニマリティ社会より、武道、茶道、色道、極道などのほうに親和性があることは、むしろ日本の戦後美術をみるといい。

このもろもろの「道」にはデュシャン以上の難問が含まれています。「好み」と「見立て」。横文字に訳せません。文字の老家中国にも通じません。それぞれ、趣味判断と慣習的制度にかかわっています。著者がデュシャンの解説戦略に用いた方策をこれにつづいて「道」の分析に適用してもらいたい。この著作でつくりだした戦略がさらにきわだつてくるように思います。

孔子の『論語』はあまりに短い。しかも本人が書いたのではない。伝聞録だ。キリストも釈迦も同じようなものだ。本人のつもりは本当のところ、よく分からない。同時代の周囲の人々、そして後世の人々がほんの少しの材料を解釈し、斟酌し、忖度し、どれが正しいかが争われ、「孔子教」「キリスト教」「仏教」が生まれていった。要するに、本当に偉い人は余白だらけの人だ。何も言っていないかもしれない人だ。カントやヘーゲルのように全部言ってしまうと、歴史の一コマになる。だが、何も言わない偉い人は不断に誰かが余白を更新してくれる。実はこうなんじゃないかと。

20世紀芸術の孔子であり釈迦であるのがデュシャンだろう。正体について喧々囂々の議論が繰り返されてきた。だが著者は言う。デュシャンは居ないのだと。本書はデュシャン論ではない。「デュシャン教」の構造と歴史に切り込んだ先鋭な批評である。目が覚める。

片山 杜秀